

戦後の酒田ー昭和から平成へ 市民生活の移り変わりー

開催期間：平成25年6月22日～9月2日

●市制施行後の酒田

酒田市の変遷

昭和4年(1929)に、酒田町と鶴渡川原村（現在の亀ヶ崎地区）が合併。2万9,979人の酒田町となり、町から市になる人口条件を満たした。その4年後の昭和8年4月1日、市制が施行され、待望の「酒田市」が誕生した。

その後、大浜工業地帯が本格操業に入った戦時下の昭和16年、西平田村、中平田村の一部、西荒瀬村の一部が合併。戦後の改革が進む昭和25年には、酒田市との合併の気運が生まれた飛島が合併する。

昭和28年、地方自治の基盤を強め、市町村を適正規模に再編成するための「町村合併促進法」が施行されると、近隣村との合併が具体化。翌29年の8月に西荒瀬村と、12月に東平田村、中平田村、北平田村、上田村、本楯村、南遊佐村、新堀村、広野村、袖浦村の9カ村との歴史的な合併が行われた。

そして、自治体を広域化することで行財政基盤を強化し、地方分権の推進に対応することなどを目的とした「平成の大合併」が進められた平成17年(2005)11月、酒田市、八幡町、松山町、平田町が合併し、新酒田市が誕生。今年で8年を迎える。



昭和38年までの市章

酒田市最初の市章は、大正4年(1915)に制定された酒田町の町章をそのまま用いたものだった。酒田の「酒」、行政を司る「土」と「農」「商」「工」を、さらに港都を象徴する錨（いかり）を図案化した。



平成17年の合併までの市章

市制施行30周年を記念し、昭和38年(1963)6月に改定した。さかたの「さ」の字を図案化したもの。下部の波頭で港、上部の翼状で酒田市の発展、円形で融和と団結を表現している。



現在の市章

平成17年(2005)11月に発足した新酒田市の市章。頭文字の「S」を骨格として、日本海を表す青と、庄内平野、鳥海山を表す緑の間に、最上川の流れて見立てた4本の波(一市三町)が、未来に向けて羽ばたく様子を図案化した。

●市街地の拡大と都市化

高度経済成長で進んだ市街地拡大

終戦後の酒田の人口は、復員や外地からの引揚、その後のベビーブームもあって急増した。市では、北千日堂前、妙法寺境内に引揚者住宅を建てて緩和を図り、昭和23年(1948)には、光ヶ丘に庶民住宅20戸、初めての市営住宅20戸を建設。急速に住宅街に変貌した。

高度経済成長を迎えると、全国的に第二次・第三次産業従事者が増加し、所得水準、生活水準が上昇。人口が都市部に集中するようになる。酒田でも同じ現象が起こり、市街地で住宅の需要が急速に高まった。そのため、市街地周辺の宅地開発が進められた。

昭和28～33年に実施した竹藪地区(若竹町)を皮切りに、昭和40年までに着手した土地区画整理事業によって、住吉町、東栄町、旭新町、若浜町、末広町、千石町、緑町、若原町、東中の口、両羽町などが誕生した。出羽大橋開通2年後の昭和49年には川南住宅団地が完成し、若宮町となった。その後も開発が進み、みずほ、松原南、こがね町、下安町、日の出町、曙町、あきは町、ゆたか、こあらなど、新しい町が生まれている。

「新住居表示」

都市化により大きく変わったものに「町名」がある。

昭和37年(1962)に「住居表示に関する法律」が公布され、市街地にある建物に順序よく番号をふり、分かりやすく住所を表示する「新住居表示」の実施が進んだ。酒田市では昭和40～42年の三カ年計画で実施し、長い歴史を持つ町名のほとんどが消えた。

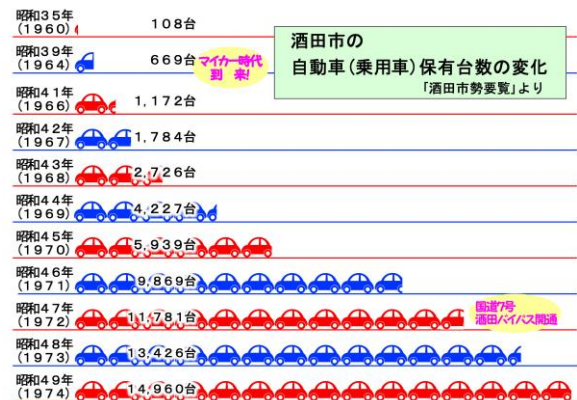
自動車の普及と道路整備

戦時中に大部分が中止されていた道路改修工事が、戦後再開した。資材不足や労賃の暴騰で工事は進まなかったが、酒田港が開港場に指定され貿易が再開したことや、自動車需要の急増に伴い、道路網の整備・拡充の必要性は一段と高まった。

昭和23年(1948)、県では太平洋側と日本海側を結ぶために、3つの路線を幹線道路に編入するように建設省に請願。同28年、山形から六十里越を通り鶴岡・酒田に至る県道が112号、石巻―新庄―酒田を結ぶ線が108号の二級国道に、それぞれ指定された。108号は昭和37年、仙台―酒田を結ぶ一級国道47号に指定された。

酒田の市街地を通過していた国道10号は、昭和27年に新潟―青森間の一級国道7号となった。同32年、建設省が両羽橋付近から市街地の東側を迂回する酒田バイパスの構想を打ち出し、同47年に開通。同60年には4車線化し、バイパス沿いに大型店の出店が進んだ。

平成9年(1997)には、東北横断自動車道酒田線の庄内あさひIC(インターチェンジ)―酒田IC間が、庄内初の高速道路として開通。同13年には酒田みなとICまで開通した。



国道7号酒田バイパス

地域住民の悲願だった出羽大橋

酒田市街地と最上川南の宮野浦地区とを結ぶ出羽大橋が完成したのは、昭和47年(1972)6月。それまで、それまで、渡し船で最上川を行き来していた地域住民にとって、架橋は昔からの悲願だった。

出羽大橋の開通とともに、住宅1,200戸の建設を計画した川南住宅団地が造成された。交通量は年々増加し、昨年12月に4車線化された。

飯森山地区には、土門拳記念館、出羽遊心館、酒田市美術館、東北公益文科大学が建てられ、文教地区として整備が進んでいる。

庄内空港

庄内空港は平成3年(1991)10月1日、国内49番目の第三種空港として開港した。

庄内で空港建設の気運が高まったのは、昭和47年(1972)頃から。当時の庄内は、山形空港など近辺の高速交通施設へのアクセスに3時間前後を要する「高速交通空白地域」だった。首都圏、関西圏と直接結び、時間距離を縮めることによって、地域の産業振興、生活文化の向上を図ることが、熱望されていた。

昭和55年から山形県の重要事業として国へ要望し、翌年には地元経済団体などで構成する「庄内空港建設促進期成同盟会」が発足。熱心な運動を展開し、建設実現にこぎつけた。

●都市化による世相の変化

柳小路マーケット

終戦後、戦災者や引揚者、復員兵があふれ、ヤミ米や進駐軍の横流し品などを売る露店が、市内のあちこちにできた。進駐軍は、「衛生上・風紀上、一カ所にまとめて監視する必要がある」と酒



田市に命令し、柳小路マーケットが形成された。

柳小路マーケットには、八百屋、魚屋、天ぷら屋、中華そば屋などの飲食店、貸し本屋、メガネ屋、下駄屋、小間物屋ほか、あらゆる品物を商う店があり、市民の暮らしを支えた。

高度経済成長期を迎えると、かつての勢いは失われ、交通面や美観、衛生面などから問題視されるようになり、酒田大火直前の昭和51年(1976)4月に完全に撤去された。

新生活運動と公民館結婚式

戦後の日本では、古い因習を取り除き、生活の合理化、近代化を目指す「新生活運動」の実践が提唱された。その一環として推奨されたのが「公民館結婚式」である。

酒田市の中央公民館では、経費1万円、披露宴会費1人500円、酒は2合以内、引き出物等廃止としている。1組目の挙式は昭和32年(1957)。当時は、本間家旧本邸を中央公民館として借用していた。「酒田市勢要覧」によると、昭和39年の利用者は70組、3,170人に上り、昭和40年前半まで盛んに行われた。その後は激減し、同50年、中央公民館が旧琢成小学校に移転すると廃止されたが、地区の公民館では少数ながら続いていた。

集団就職

高度経済成長が始まった昭和30年代(1955～)、地方の少年少女が、都会の労働力不足を補った。職安職員が中学校に出張して、教師と生徒、その父母に面接し、希望する職場をあっせん。生徒たちは、家族や友人、後輩に見送られて特別列車で上京した。昭和36年頃をピークに下降線をたどり、40年代には姿を消したが、代わって農家の出稼ぎが出現する。

青年団活動

戦後、地域活動の担い手となったのは、青年たちの自主組織である「青年団」だった。庄内では農村部を中心に、各地域に青年団があり、祭りや盆踊りなどの地域行事の手伝いや、奉仕活動などを行った。スポーツや、演劇、音楽などの文化活動、レクリエーション活動を通して、青年同士の交流の場にもなっていた。

昭和30年(1955)に酒田市連合青年団が、同37年には庄内地方青年団連絡協議会(庄青協)が結成され、地域間の交流も活発化した。しかし、農業青年の減少とともに、青年団も縮小。庄青協は昭和63年になくなり、酒田市連合青年団は平成12年(2000)に休団した。



連合青年団新春ダンスパーティー

(昭和45年)

戦後の食卓を支えたアバ

リヤカーで新鮮な海産物を売り歩いたアバ。庄内弁で「母親」を意味し、まさに庄内の食卓を支える存在だった。アバたちが立ち上げた「田川地方行商協同組合」には、最盛期800人以上の組合員がいたが、スーパーの進出などにより衰退。今年3月、惜しまれながら解散した。

大根市…晩秋の風物詩だった。各家庭では、大量の大根を買い求め、越冬用の漬物を準備した。

新井田川ボート遊び…市民に親しまれた娯楽のひとつだったが、漁船溜りになり禁止された。

市民盆踊り大会…昭和40年代ころまで、日和山公園で盛大に開かれていた。

●戦後の文化活動

本間美術館

本間美術館は、戦後間もない昭和22年(1947)、本間家4代・光道が文化10年(1813)に建てた本間家別荘を市民に開放する形で開館した。全国に先駆けた地方都市の私立美術館であり、美術展の開催にとどまらず、音楽会、演劇活動なども行い、幅広く市民の文化活動の拠点となってきた。

みちのく豆本

故・佐藤公太郎氏が「みちのく豆本の会」を主宰し、昭和32年(1957)～平成7年(1995)までの38年間に、150冊(うち別冊20冊)を刊行。多くの人に愛された。



市民オペラ「ミカド」上演

酒田市名誉市民の故・加藤千恵氏が昭和21年に開設したボーカル・スタジオが、昭和32年に港座で初めてオペラを上演し、大好評を博す。公演は昭和34年まで7回に及び、当時のニュース映画で全国に紹介された。

酒田演劇鑑賞会

昭和31年(1956)、中央の新しい演劇を恒常的に鑑賞したいと、市民有志、労働組合などが集まり、俳優座の「ピクニック」を、実行委員会形式で上演した。その成功を土台に、山形県初の鑑賞組織「酒田市民劇場」が発足する。昭和37年からは「酒田演劇鑑賞会」として、質の高い演劇を鑑賞する機会を提供。平成24年(2012)6月に休会するまで、279回に及ぶ例会を企画・開催した。

●戦後の娯楽

娯楽の中心だった商店街

生活の復興とともに、中心商店街の近代化が進んだ。昭和34年(1959)に4階建ての「小袖屋デパート」が開店する。同じ年に開店した「てぶくろ横丁」は「県下で最も都会的なセンスを持つ店」と評判になった。同35年には、ニコニコ食堂やおしゃれマートなどを持つ4階建ての「トー屋」が新装開店し、36年には「清水屋」が庄内初の本格的なデパートとして新店舗をオープンし、人気を集めた。

休日には、酒田市や周辺町村から大勢の買い物客が訪れ、セールやイベントともなると、まつりのようなにぎわいを見せた。



中町ネオンまつり

昭和26年(1951)8月、中町商店街で初めてネオンアーチを設置した。1基100万円のネオン3基を点灯し、3日間に及ぶ「第1回ネオンまつり」を盛大に開いた。翌年以降もドン・シャン・サービスとして続けた。昭和33年には浜町でもネオンアーチを設置し、街灯祝賀会を行っている。

酒田五店会が主催した風船まつり

戦後、中村太助商店、中村イトヤ、ごろや、小松屋、七桜が「酒田五店会」を組織。利益を社会に還元しようと、レコードコンサートなどの文化活動、冊子『てぶくろ』の発行を行った。

昭和32年(1957)に始まった「風船まつり」もそのひとつ。大型バスに風船1万個(三角くじ付)をつけて市内を巡回し、道行く人にプレゼントした。写真コンテストも同時に開催している。

昭和34年、五店会を母体に中村書店、トミヤ、中常、西田薬局などが加わった「てぶくろ横丁」が開店し、人気を呼んだ。

酒田の映画館

映画は、戦後最大の娯楽だった。酒田には戦前から「港座」「中央座」「酒田劇場（日活）」があり、戦後になると、昭和24年(1949)に洋画専門の「グリーン・ハウス」、昭和29年に「シバタ映画劇場」がオープン。全盛期を迎えた。

旧松山町では、戦前に閉館した「松山館」が、昭和25年頃に「千歳館」として新装開館している。浜中や、旧八幡町の観音寺、升田などにも映画館があった。

しかし、テレビの普及により映画産業は斜陽化し、酒田劇場は閉館。グリーン・ハウス、中央座、シバタ劇場は昭和51年の酒田大火で焼失した。松山館は昭和40年頃に閉館した。

昭和49年に「酒田シネマ旭」がオープンしたが、平成14年(2002)に閉館。港座も同じ年に幕を閉じ、酒田から映画館がなくなった。港座は、平成21年に市民有志により再オープンし、映画上映やコンサートなどを行っている。



中央座40周年

テレビの普及

昭和28年(1953)、NHKテレビの本放送が始まった。当時はテレビの価格が高く普及しなかったため、盛り場や公園などに「街頭テレビ」を設置。人々はプロレスやプロボクシングに熱狂した。昭和34年、皇太子ご成婚というビッグイベントを機に、白黒テレビの普及が一気に進んだ。

酒田では、NHK鶴岡支局が開局し、山形放送(YBC)のテレビ放送が始まった昭和35年頃から急速に普及し、同40年には普及率がほぼ90%に達している。



●酒田を沸かせた出来事・ブーム

ヘレン・ケラー来酒…昭和23年(1948)

身障者事業のキャンペーンのため、酒田を訪れた。琢成小学校で開かれた歓迎県民大会には、3,000人以上の聴衆が詰め掛けた。ケラーはその後、本間美術館で美術品を鑑賞する。その時の礼状は、今も同美術館に保存されている。

映画「氷壁」ロケ…昭和33年(1958)

井上靖原作の映画『氷壁』のロケが行われ、俳優の野添ひとみ、菅原謙次、浦辺糸子らが酒田を訪れた。初めての映画ロケに市民は大騒ぎとなった。舞台となったのは日和山公園や、下日枝神社、鑑谷邸など。日和山ロケには、大勢の見物人が集まり、木の上から見る人もいた。

皇太子ご夫妻が観戦された47インターハイ…昭和47年(1972)

全国高校総体が山形県で開催され、酒田は女子バレーボール、ボクシング、男女軟式庭球の会場になった。皇太子ご夫妻（現天皇・皇后両陛下）が観戦された。ボクシングヘビー級で酒田南高校の斎藤彰が優勝した。

酒田から甲子園へ

昭和52年(1977)、酒田東高校が春の全国選抜高校野球に初出場する。その夏、酒田工業高校が夏の全国高校野球選手権に初出場し、前年に酒田大火に見舞われた酒田市民を力づけた。

20年後の平成9年には酒田南高校が夏の甲子園に初出場し、これまで春・夏合わせて11回の出場を果たしている。



おしんブーム…昭和58年(1983)

NHKの連続テレビ小説「おしん」のロケが市内で行われ、1月には乙羽信子、小林綾子らが、3月には田中裕子らが訪れた。最高視聴率62.9%を記録し、大ブームを巻き起こした。その後も繰り返し再放送され、世界各国でも放映されている。

おしんが酒田の米問屋・加賀屋に子守として奉公することから、酒田は「おしんのふるさと」として人気を呼び、酒田の観光振興にも大きな影響を与えた。

今年10月には、鶴岡出身の富樫森監督による映画版「おしん」の公開が予定されている。

べにばな国体…平成4年(1992)

べにばな国体が山形県で開催された。酒田では、9月の夏季大会で漕艇競技が行われ、秋篠宮ご夫妻が臨席された。10月の秋季大会ではテニス、バレーボール、ラグビーが行われた。



べにばな国体炬火リレー(旧八幡町)

「おくりびと」ブーム…平成21年(2009)

平成20年、滝田洋二郎監督の映画「おくりびと」のロケが、旧割烹小幡、希望ホール、旧港座などで行われ、俳優の本木雅弘、広末涼子らが訪れた。公開翌年、アカデミー賞外国語映画賞を受賞し、大ヒットした。旧小幡は、映画に登場した「NKエージェント」として一般公開され、観光名所となっている。

●市民と海

酒田港の近代港湾化

昭和4年(1929)、酒田港は第二種重要港湾に指定され、近代港湾化が本格的に進んだ。昭和12年には大浜に鉄興社ができ、大浜工業地帯が形成される。戦後、昭和26年に重要港湾に指定され、同37年には大浜に、待望の1万トンバースが竣工した。昭和49年には酒田北港が完成する。平成に入ると、中国黒龍江省との新航路「東方水上シルクロード」、韓国・釜山港との定期コンテナ航路が開設し、平成15年には総合静脈物流拠点港（リサイクルポート）に指定。そして平成22年、国の直轄港湾整備事業などを進める「重点港湾」に選定され、さらなる活性化が期待されている。

港湾整備によって、地域住民が親しんだ海は姿を変えたが、酒田港を会場にした祭りやイベント、大型船の見学など、新たな楽しみを提供している。本港地区には、さかた海鮮市場や船場町緑地ができ、市民や観光客でにぎわっている。

酒田港まつりの始まり

昭和4年(1929)、酒田港は念願だった第二種重要港湾に指定される。7月に町をあげての祝賀イベントが繰り広げられ、その中のひとつとして、酒田商工組合連合会主催の花火大会が行われた。

祝賀花火大会は大好評となり、川開き花火大会の継続を求める声が高まったため、毎年この時期の恒例行事として開催されることになった。これが夏の風物詩・酒田港まつりの始まりである。

戦時中は中断したが、昭和22年に復活。現在は8月の第1土曜日に酒田花火ショーが、その前日に酒田湊・甚句流し（踊りパレード）が行われている。



港まつり花火大会(昭和33年)
本間美術館提供